



園だより

文京区立第一幼稚園
令和6年度6月号

URL <http://www.bunkyo-tky.ed.jp/dai1-kg/>

サナギの羽化を見つめる

副園長 工藤 真規子

バラ門の脇のびわが色づいてきました。今年も収穫をして味わうことができそうです。第一幼稚園はどの季節にも、四季を感じる様々な実のなる木や、花や紅葉の美しい木々があります。何十年も前に植えてくださった方たちのおかげで、子供も大人も自然に親しむことができます。

5月は、年中・年長組で飼育していたアゲハチョウが次々に羽化しました。アゲハの幼虫は脱皮の度に目に見えて大きくなります。終齢になる時は色も変わるので興味をもちやすく、幼児の観察に適しています。緑組の幼虫は、サナギになる時に糸がうまく張れず、下に落ちたまま動かなくなってしまいました。担任が画用紙を漏斗状に丸めて支えを作って様子を見守ること数日。



ある朝、サナギが透けて羽の模様が見えるようになり、予感と期待をもっていたところ子供たちの目の前で羽化が始まりました。「もうダメかな…」と思っていただけに感動の瞬間です！

子供たちは羽化の様子を息を呑んで見守っていました。「頑張れ！」とささやいたり、羽を動かしているアゲハに「体操しているんだね」と言ったりする子もいました。小さく折りたんでいた羽を伸ばして広げていく動作なので「体操」とは意味が異なりますが、科学的に正しい知識をすぐに教えるのではなく、まずは子供が自由に感じたり自分なりに予測したりして考えを出し合うことを担任は大事にしています。

学級で相談して、翌日放すこととなりました。それまでの間、蜜を飲めるようランタナの花を入れる、本で調べた10%濃度の砂糖水を作って入れるなど、弱らないように工夫をしていました。空に飛んでいくアゲハをみんなで嬉しく送り出しました。

アゲハの羽化に続いてカブトムシの幼虫がサナギになりましたが、土の湿度が何らかの理由で土中にサナギの部屋（蛹室）が作れず、2匹が土の上でサナギになってしまいました。担任と子供が心配そうに相談に来たので、『人工蛹室』を作る方法を提案しました。サナギは体を動かして体液を循環させるため、転がるような動きのできる藪のようなスペースがないと羽化不全を起こして、羽や足が曲がり、羽化ができずにそのまま命が尽きる個体もあるからです。



←これが、担任が作り方を調べ、子供たちと一緒に作った『人工蛹室』です。この中で、サナギたちは時折ピクピクと動いて、静かにカブトムシへの体へと変化しつつあります。

生き物の飼育はいつも無事に育つことばかりではありません。その度、子供たちと「何が起きているのか」「どうしたらよいのか」を話して、考え予想する、図鑑やインターネットで調べる、知っていそうな人に聞く、などさまざまな情報の得方を経験しています。その中でよさそうな方法を見付け、試し、実際にやってみて確かめることを通し、それぞれに気づきを得ています。一生懸命に考えたり試したりした体験がずっと心に残っていくでしょう。そして友達や先生の姿から周りの子供も興味関心を広げていきます。

大事に育てている「生命」に対しての心情があるからこそ、大人も子供も本気で考え合う姿につながりました。正解のない問いを探る経験を、幼児期から大事にしたいと思います。